

第1018回オーチャード定期演奏会

6月22日(日) 15:00開演 Bunkamura オーチャードホール

第1019回サントリー定期シリーズ

6月23日(月) 19:00開演 サントリーホール

第171回東京オペラシティ定期シリーズ

6月24日(火) 19:00開演 東京オペラシティ コンサートホール

指揮・ヴァイオリン*: ピンカス・ズーカーマン

コンサートマスター: 三浦章宏

6
/22

エルガー:

弦楽セレナード ホ短調 Op. 20 (約12分)

- I. アレグロ・ピアチェヴォーレ
- II. ラルゲット
- III. アレグレット

6
/23

ハイドン:

ヴァイオリン協奏曲第1番 八長調 Hob. VIIa:1* (約20分)

- I. アレグロ・モデラート
- II. アダージョ
- III. フィナーレ: プレスト

— 休憩 (約15分) —

6
/24

モーツァルト:

交響曲第41番 八長調 K. 551『ジュピター』(約35分)

- I. アレグロ・ヴィヴァーチェ
- II. アンダンテ・カンタービレ
- III. メヌエット: アレグレット
- IV. モルト・アレグロ

主催: 公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団

助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動)) | 独立行政法人日本芸術文化振興会

協力: Bunkamura (6/22)



♪本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。

♪演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフのご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。

♪曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。

♪演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。

♪演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。終演後のカーテンコールも、マナーを守ってお楽しみください。

出演者プロフィール



©Cheryl Mazak

指揮・ヴァイオリン

ピンカス・ズーカーマン

Pinchas Zukerman, conductor & violin

ピンカス・ズーカーマンは、50年の長きにわたりヴァイオリン奏者、ヴィオラ奏者、指揮者、そして室内楽奏者として不動の地位を築いている。そのヴィルトゥオージティ、豊かな表現、美しい音色、完璧なまでの音楽性は、グラミー賞受賞作を含む100枚を超える録音にも聴く事が出来る。

近年の活動としてメータ指揮ウィーン・フィルとのヨーロッパツアー、イスラエル・フィル、バルセロナ響、シンフォニア・ヴァルソヴィア、リヨン国立管、サンタ・チェチーリア国立アカデミー管、東京フィル、イギリス室管等への客演やズーカーマン・トリオでのラヴィニア、アスペン、アメリア島各音楽祭への出演等が挙げられる。

これまでにナショナル・アーツセンター・オーケストラ音楽監督、ロイヤル・フィルハーモニー管首席客演指揮者、アデレード響アーティスト・イン・アソシエーションを歴任。音楽教育にも熱心に携わり、マンハッタン音楽学校では長きにわたり後進の育成を行っている。器楽奏者として初めてロレックス・メンター・アンド・プロテジェ・アーツ・イニシアティブのメンターも務めた。現在ダラス響芸術・首席教育パートナーとして南メソジスト大学・メドーズ音楽院でも教育活動を行っている。

6/22

6/23

6/24

楽曲紹介

解説=野本由紀夫

6/22

6/23

6/24

今月の定期演奏会について

本日のマエストロは、ヴァイオリン奏者としても指揮者としても不動の地位を築いているピンカス・ズーカーマンである。プログラムのうちエルガーとモーツァルトは指揮に専念し、ハイドンの協奏曲のみ弾き振りを披露する。

ズーカーマンの東京フィルへの登場は、2023年5月7日の「渋谷の午後のコンサート」以来となる。そのときはヴァイオリニストの三浦文彰との共演が話題だったが、本日はその父君の三浦章宏がコンサートマスターを務める。

今回ズーカーマンは、5月に金沢と東京でのガルガンチュア音楽祭(ラ・フォル・ジュルネ金沢の後継イベント)で来日し、6月の東京フィルでの弾き振りのあと、10月にもサントリーホールでの「ピンカス・ズーカーマンの芸術」で弾き振りが予定されている。来月77歳になるとは思えない、精力的な活躍ぶりである。本日の弦楽器群が活躍するプログラムでも、弦楽器奏者ならではの濃密で温かい表現が楽しみだ。

エルガー

弦楽セレナード ホ短調 Op. 20

弦楽セレナード(弦楽合奏のためのセレナード)は、第2の英国国歌ともいわれる行進曲『威風堂々』第1番(1901)で名高いエドゥアルド・エルガー(1857-1934)の成功作。先日、エルガーの「遺作」ともいうべき交響曲第3番(アンソニー・ペイン補筆版)が東京フィルの4月定期で演奏されたばかりだが、弦楽セレナードは作曲者初期の1892年5月(35歳)に完成し、作曲者も手ごたえを感じたという。

作品は友人でオルガン製作者のW.H.ウィンフィールドに献呈されているが、3回目の結婚記念日のプレゼントとして、妻キャロライン・アリスに贈られた。ちなみに、1888年の婚約のときに贈られたのが「愛の挨拶」である。周囲の大反対を押し切った結婚であった。

第1楽章 3部形式に結尾(コーダ)が付いた楽章。冒頭のヴィオラのリズム

(タッタタ タタタ | タッタタ タタタ)が重要なモチーフとなる。中間部の甘美なメロディは、コンサートマスターの独奏でも歌われる。冒頭の音楽が再現されると、終結部となって静かに終わっていく。

第2楽章 エルガーが生み出したもっとも美しい緩徐楽章のひとつ。わずか5分の長さながら、この楽章を演奏したいからプログラムとして選曲する、とさえ言われる。メロディの起伏と感情の起伏がみごとにマッチした音楽づくりである。パート間の追いかっこ(模倣)が多いことも特徴。最後は心穏やかに閉じていく。

第3楽章 短い導入のあと、ヴィオラでメロディが提示され、すぐに第1ヴァイオリンやチェロ・コントラバスが模倣する。ピッツィカート(弦を指ではじく奏法)のあと、第1楽章の音楽が回想されると、そのまま短い結尾部となって静かな和音で終わる。

【作曲年代】1892年5月完成 【初演】第2楽章:1893年4月7日、ヘリフォードにて。全楽章:1896年7月23日、アントウェルペン(アントワープ)
【楽器編成】弦楽5部

ハイドン

ヴァイオリン協奏曲第1番 八長調 Hob. VIIa:1

ヴァイオリン協奏曲第1番八長調は、ヨーゼフ・ハイドン(1732-1809)がパウル・エステルハージ侯の宮廷に任用された1761年から1765年までに作曲されたと考えられる。下限の65年というのは、この年に自筆の作曲カタログに「八長調のヴァイオリン協奏曲」と記入しているからである。しかも、「ルイージのために作曲」と追記がある。そのルイージとは、エステルハージ侯家のオーケストラの第1ヴァイオリン奏者だったルイージ・トマシーニ(1741-1808)のことである。彼自身もすぐれた作曲家であった。

「ルイージのために」という追記からすると、おそらくハイドンは演奏旅行中に作曲したのではないかと推測される。というのも、モーツァルトの父レーオポルト(1719-1787)が1763年6月21日付の手紙のなかで、「トマシーニがまさにミュンヘンで演奏し、ウィーンへの帰還途中、各地で演奏予定」と報告しているからである。

当時のエステルハージ侯家のオーケストラは13~16名しかいなかったらしく、

6/22

6/23

6/24

まるでヴィヴァルディの協奏曲を思わせるような、イタリア・バロック音楽の風情をまだ残した作品である。

なお、今回のカデンツァは、アメリカの現代作曲家でピアニスト、指揮者でもあるマーク・ネイクルグ(1946-)の作曲である。彼は40数年にわたってズーカーマンの友人であり、CD録音ではフランク(1822-1890)のヴァイオリン・ソナタのピアノ伴奏も担当している。本日は、ズーカーマンの弾き振りで楽しみいただく。

第1楽章 協奏曲型のソナタ形式の楽章。オーケストラで一回提示部を演奏したのちに、独奏ヴァイオリンが再び提示部を華麗に彩る。楽章終わり近くにカデンツァが挟まれる。

第2楽章 アダージョの緩徐楽章。弦楽オーケストラは、前奏部と後奏部は弓を使った演奏だが、主部はピッツィカートで独奏ヴァイオリンを伴奏する。ギターやマンドリン、リュート伴奏による一種のセレナード(夜想曲)を思わせる。

第3楽章 プレストの急速な楽章。ロンド・ソナタ形式的で、メロディはA-B-A-C-A-B-Aのような並びながら、転調の仕方はソナタ形式のようである。独奏ヴァイオリンに10度音程(たとえば「ド」から10個上の「ミ」)のような、指をかなり広げなければならない箇所も多く出てくる。華麗で快活な楽章である。

【作曲年代】1761年以降、遅くとも1765年 【初演】不明

【楽器編成】弦楽5部、チェンバロ、独奏ヴァイオリン

モーツァルト

交響曲第41番 八長調 K. 551『ジュピター』

第41番は、モーツァルト(1756-1791)が死ぬ3年前に完成した最後の交響曲である(第37番は欠番)。彼は1788年の夏(32歳)、6月下旬から8月上旬のわずか1か月半のあいだに第39番から第41番までのいわゆる「三大交響曲」を作曲した。

モーツァルトは、フランス革命(1789-1799)の「前の世代」の音楽家だったので、基本的に「お金」にならなければ作曲しなかった。つまり、注文されるか、興行収入の見込まれるときしか、作曲しなかった。だから、第41番も何らかの収入のあてがあったはずだ。今日の研究では、おそらく借金の返済もしくは生活費ねん出のためだったのではないかと考えられている。実際のところ、モーツァルトの

年取は今日の病院院長ほどもあったにもかかわらず、あまりに浪費が激しかった。最終的に、自身の埋葬代さえ準備できなかった。

交響曲第41番は、モーツァルトがJ.S.バッハ(1685-1750)の音楽の存在を知って間もないころの作曲のため、「フーガ」への興味があきらかだ。そのため、もともとは「終曲フーガ付きの交響曲」と呼ばれていたほどである。よく知られる愛称「ジュピター」で呼んだのは、イギリスの興業主J.P.ザロモン(1745-1815)のようだ。ザロモンはモーツァルトの没後、ハイドン(1732-1809)を1791年から95年にかけてイギリスに招聘し、「ザロモン交響曲シリーズ」をプロデュースしたことで知られる。そのザロモンが1819年10月20日に、エディンバラのコンサートで「ジュピター」という愛称を用いたという。

ジュピターとはローマ神話の全能の神(ギリシャ神話のゼウスに相当)のことだが、スケールの大きい、しかも端正な音楽のたたずまいは、「ジュピター」という愛称にふさわしいかもしれない。

第1楽章 ソナタ形式の楽章。さまざまなメロディがコントラストを生み出す。提示部の最後には、この交響曲が完成する3か月前に完成したばかりの喜劇風アリア「手に口づけをすれば」K.541のメロディが流用されている。

第2楽章 アンダンテ・カンタービレ(歩くようなテンポで歌うように)と指示のある、弱音器付きの弦楽器が用いられた緩徐楽章。モーツァルトの全交響曲のなかで「カンタービレ」という表記は、この楽章以外にはない。柔らかく透明な響きの音楽が練り広げられる。

第3楽章 メヌエツト楽章。半音階的な下行メロディを繰り返す。

第4楽章 まさに白眉となる楽章。冒頭メロディ「ド♯レ♯ファㇻミ」(譜例の**主題1**)はグレゴリオ聖歌に由来すると考えられるが、この交響曲で決定的な役割を果たすため、「ジュピター音型」と呼ばれる。じつは、先立つ楽章のなかでも「ジュピター音型」はそれとなく登場していた。この音形や他の**主題2~5**が多重フーガのように非常に複雑に絡み合っ、クライマックスが築かれていく(【図表】参照)。間違いなくモーツァルト最高傑作のひとつであろう。

【作曲年代】1788年8月10日完成 【初演】不明

【楽器編成】フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

主題1



主題2



主題3



主題4



主題5



【図表】第4楽章の区分と主題構成(作表:野本由紀夫)

小節数	1	14	36	56	65	74	86	94	115	136	158		
主題1	■		■								■		
主題2			■				■					■	
主題3					■		■						
主題4							■						
主題5							■		■				
区分	主要主題					副主題			小結尾				
	提示部								提示部 繰り返し		展開部		

225	253	263	272	284	292	313	335	356	402	409	423
■								■		■	
		■		■				■		■	
				■		■		■		■	
						■		■			
主要主題 再現			副主題 再現			小結尾 再現		コーダ			
再現部						展開部と再現部 繰り返し					

のもと・ゆきお／玉川大学芸術学部元教授。NHK-FM「オペラ・ファンタスティカ」レギュラー解説者。NHK「ららら♪クラシック」、「チコちゃんに叱られる」、NHK-BS「フジコ・ヘミング」追悼番組ほかに出演。NHK「クラシックTV」音楽史監修者。昨年末、横浜アリーナで2,000人の第九を指揮した。音楽之友社より『鑑賞“誤解”講座』を近日刊行予定。